

平成26年度 オジロワシ・オオワシ保護増殖検討会
議事概要

1 開催日時および開催場所

日 時： 平成27年3月10日（火） 13:30～16:30
場 所： 釧路地方合同庁舎5階 第一会議室

2 出席者一覧（敬称略）

<検討員>

河口洋一 徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部 准教授
黒沢信道 北海道ひがし農業共済組合 総務部長
齊藤慶輔 株式会社猛禽類医学研究所 代表取締役
白木彩子 東京農業大学生物産業学部 准教授
中川元 元・斜里町立知床博物館 館長
藤巻裕蔵 帯広畜産大学 名誉教授

<関係機関>

北海道森林管理局、胆振東部森林管理署、十勝西部森林管理署、北海道開発局、網走南部森林管理署（欠席）、根釧東部森林管理署（欠席）

<事務局>

北海道地方環境事務所、釧路自然環境事務所、羅臼自然保護官事務所、釧路湿原自然保護官事務所

<オブザーバー>

株式会社猛禽類医学研究所

3 会議の概要

(1) オジロワシ・オオワシ保護増殖事業者からの報告について

事業者より以下の事業について報告を行った。

◎環境省

1) オジロワシ・オオワシ保護増殖事業の実施報告

① 平成25年度海ワシ類越冬個体数調査結果解析等

・越冬期の海ワシは北海道内で季節的な移動と、限られた地域への集中と分散を繰り返し、越冬初期には自然餌資源、越冬中期～後期には人為的餌資源にシフトしていることが明らかとなった。

② 平成26年度海ワシ越冬個体数調査（実施中）

・北海道全域の海ワシ類の越冬個体数の経年的な変動、餌資源等の把握を目的と

して実施した。

- ・越冬期間中の移動や餌資源の変化を把握するため、オジロワシ・オオワシ合同調査グループが 1980 年代より行っている越冬個体数調査も兼ねて実施した。

2) オジロワシの風力発電施設による衝突回避検討事業

① 平成 25 年度GISによる生息適地モデルの解析結果

- ・オジロワシの冬個体数調査結果および環境要因を用いて、GISによるオジロワシの生息適地モデル解析を実施し、昨年度までの環境要因のデータに、シロサケ量推定データを追加したが、精度の向上はみられなかった。

② 平成 25 年度バードストライク発生に関する要因解析結果

- ・道内の風車において、バードストライクが起こる原因の解析を行い、関係性の高い要因として風車のブレードサイズデータを追加したが、精度は落ちる結果となった。

③ 平成 26 年度GISによる生息適地モデルの解析及びバードストライク発生に関する要因解析（実施中）

- ・オジロワシの生息適地と風力発電施設の立地適地の重なりをGIS解析し、バードストライク発生危険地域の地図化を試みた。

<意見等>

- ・オジロワシがサケを捕食する地点は、捕獲量だけでなく水深等の要素も重要な条件となるため、そういったデータを収集する必要がある。
- ・バードストライクが確認されていない場所は、発生していないとして解析上は処理されているため評価としては限界がある。

3) GPSによる追跡調査

① 平成 25 年度追跡調査結果

- ・羅臼町放鳥個体であるオジロワシ 1 羽は、放鳥直後はウトロ側に移動しており、厳冬期は漁業活動から投棄される魚に依存していたと推測されたが、2014 年 4 月 15 日以降に個体の確認はできていない。
- ・風蓮湖放鳥個体であるオオワシ 1 羽は、放鳥後南下した後、風蓮湖に戻り氷下待網漁の雑魚に依存していると推測され、一時行方不明となっていたが、その後目撃情報が寄せられている。また、オジロワシ 2 羽の内 1 羽は、放鳥地付近に留まり氷下待網漁の雑魚を求める動きが観察されたが、その後死体で回収された。他の 1 羽は現在も追跡中である。

② 平成 26 年度追跡調査結果

- ・標津町で野生復帰させたオジロワシ 1 羽は死亡が確認され、八雲町で野生復帰

させたオオワシは再収容されている。

4) WLCにおける傷病個体の収容・治療・リハビリ等

- ・釧路湿原野生生物保護センター（WLC）において、傷病個体の収容・治療・リハビリ・野生復帰を行うとともに、収容原因の究明に努めた。
- ・オジロワシ 19 羽、オオワシ 12 羽を収容し、オジロワシ 1 羽、オオワシ 1 羽を放鳥。現在、オジロワシ 17 羽、オオワシ 12 羽を飼育中である。

5) 知床国立公園における取組み

① 長期モニタリング調査

- ・世界遺産地域のモニタリング調査の一環として、平成 22 年度より越冬個体数調査を継続している。

② 羅臼海域における観光船からの海ワシ類への餌付け対策

- ・観光船へのヒアリング、餌付けの現状と餌に依存する海ワシ等鳥類の個体数調査を実施し、持続可能な海ワシウォッチングツアーの実施に向けて、餌付けに関する新たな地域ルールの方策とモニタリング体制の検討を含め、関係団体と調整中である。

6) 普及啓発

- ・鉛中毒防止を目的として普及啓発用パンフレットの配布を行った。
- ・釧路湿原野生生物保護センターの展示・バックヤードツアーの開催等による普及啓発を行った。

◎北海道森林管理局

1) 平成 26 年度事業の実施結果

① 希少野生動植物種保護管理事業結果

- ・オジロワシ生息地保護林において、自然保護管理員による巡視を実施した。

② 希少野生生物生息状況捕捉調査結果

- ・平成 25 年度の上士幌町糠平湖畔沿いオジロワシ営巣確認区域において、営巣等の利用状況について調査を行い、今年度も繁殖に成功したことを確認した。

③ 営巣地周辺におけるエゾシカ捕獲事業の調整結果

- ・営巣地周辺のエゾシカ捕獲箇所について、研究者と事前検討を行い、捕獲場所および実施期間の調整を行った。

2) 平成 27 年度事業の実施計画

- ・巡視事業について平成 26 年度同様に実施予定である。

◎北海道開発局

- 1) 平成 26 年度オジロワシ・オオワシ保護増殖に関わる事業実施状況
 - ・札幌、旭川、室蘭、釧路、帯広、網走、留萌、稚内の各開発建設部において、河川および道路整備事業の際に、繁殖状況調査・生息状況調査等を行い、必要に応じて専門家の助言を受けながら適切な保全対策を行った。

<意見等>

- ・北海道開発局が行った保全対策について、専門家より受けた助言等データの蓄積を環境省で行っていくべき。

- 2) 平成 27 年度オジロワシ・オオワシ保護増殖に関わる事業実施計画
 - ・平成 26 年度同様に実施予定である。

(2) 関係者からの報告について

関係者より以下について報告を行った。

◎北海道

- 1) 北海道エゾシカ対策推進条例の公布（平成 26 年 3 月）にあたり、普及啓発のためのチラシ・ポスターの作成、検問・パトロールの実施、逐条解説の作成・配布等を行った。

<意見等>

- ・交通事故などの被害を無くすことは難しいが、鉛弾を撤廃できれば鉛被害は無くなる。鉛中毒が未だに発生しているという事実を、国民全体が認識するためにも鉛被害の公表が必要である。
- ・環境省のホームページで、鉛中毒発生数の統計が 2008 年までしか公表されていないことから、最新の統計まで公表するべき。

◎齊藤委員

- 1) GPS アルゴス送信機によるオジロワシの長期行動追跡
 - ・風力発電等の開発に際して適切な影響回避・緩和策を講じられるよう、オジロワシの行動形態を把握し、ハザードマップやアボイドマップの作成に向けた研究を実施予定。

<意見等>

- ・送信機を装着するためのハーネスは、オジロワシに対する影響が考えられることから、慎重に十分な事前検証等を行っていただきたい。

◎河口委員

- 1) 鳥類に対する風力発電の環境影響評価の迅速化と適正化を両立させる評価手法開発
 - ・環境影響評価手続き期間の半減を可能とするよう、適正化と両立させる評価手法について、関島 恒夫氏（新潟大学）を代表とする共同提案者にて評価手法を検討中。

◎中川委員

- 1) 越冬期のオオワシ・オジロワシ餌資源の課題と解決方法
 - ・越冬期中期から後期に人為的餌資源に頼るワシ類が多いことから、自然餌資源としての河川遡上サケを増加させるため、ウライ撤去時期の検討等の対策を提案する。

<意見等>

- ・自然の餌資源に変えていく方法と同時に、人為的餌資源を減らしていくことに関心を持って進めていくべき。
- ・気候変動による影響は簡単にコントロールすることはできないが、人為的にコントロールされている部分は変えていくことが可能であることから、他機関と連携して進めていただきたい。
- ・湧水が出ている川の分布がわかれば、サケの産卵場を考える上で有効であるため、主要河川での調査を北海道開発局で検討いただきたい。

(3) 今後の予定について

今後の予定について説明を行った。

◎環境省

- 1) 平成 27 年度オジロワシ・オオワシ保護増殖事業実施予定
平成 27 年度オジロワシ・オオワシ保護増殖事業実施予定は以下のとおり。
 - ① 海ワシ類越冬個体数調査結果解析等
 - ② WLCにおける傷病個体の収容・治療・リハビリ等
 - ③ 知床国立公園における取組み
 - ・長期モニタリング調査

・羅臼海域における観光船からの海ワシ類への餌付け対策

④ 普及啓発

⑤その他、保護増殖事業を広くアピールするために、会議の形態を円卓会議という形に改めたい。

<意見等>

・オジロワシ、オオワシにとって、死亡に繋がるリスクの軽減が重要であるが、来年度の保護増殖事業の実施予定に盛り込まれていない。現状把握やシミュレーションの要素ばかりではなく、具体的なリスク軽減のためのアクションが必要である。

ー保護増殖検討会を円卓会議に改めることについてー

・河川環境、餌資源であるサケの増加策への取り組みなど、テーマを絞って行うのであればアピール度は低い。

・調査結果の内容によっては公表できないものもあり、専門家による検討会とテーマを絞った円卓会議の二本立てにしてはいかがか。

・営巣地に関する情報などが含まれていない場合は、検討会を公開するべきである。

・ワシにとって今何が重要かといえば、他機関と連携してウライを1本抜くというようなことであり、前向きにオープンな形で保全策を進めていくことを考えれば円卓会議でも良い。

・円卓会議ではテーマを決めて議論するというだけで、保全対策を積極的に進めていくムードが感じられないのではないか。

(4) その他

<意見等>

・河川工事などによる保全対策等については、建設管理部ごとに対応が違っているため、希少種の保護について各管理部に徹底を求める。

・アセスメントの手続きに、衝突リスクPVAなどを盛り込むと良い。

・環境影響評価を行う上で、精度の良いデータは研究者でなければ出せないことが、保護増殖事業における課題である。

(以上)